# 沢田遺跡

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 14 集

2017年3月

南陽市教育委員会

# で か だ 沢田遺跡

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 14 集

平成29年3月

南陽市教育委員会



ST3出土土器



沢田遺跡完掘状況(東より)



沢田遺跡完掘状況(北西より)

この度、南陽市埋蔵文化財調査報告書第14集「沢田遺跡発掘調査報告書」を発行する運び となりました。

本書は、置賜広域行政事務組合南陽消防署の整備事業に伴い埋蔵文化財保護との調整を図るために南陽市教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

沢田遺跡は、市内沖郷の島貫地区から郡山地区にかけて広がる弥生時代~平安時代の遺跡で、置賜郡衙関連遺跡である郡山遺跡群の中核を成す大きな遺跡です。調査は平成27年5月に試掘調査を行い、引き続いて本調査を実施しました。

平安時代の郡衙関連遺跡として重要な沢田遺跡の調査進展は、市内にあったと推定されている古代置賜郡衙の実態解明のために非常に大切であると考えています。沢田遺跡一帯では宅地化が急速に進んでおり、今後とも開発との調整を行い、遺跡の保護を確実に実施していくことが必要となります。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、旧石器時代から中世に至る多くの遺跡が存在します。人々が生活した住居跡・古墳・役所跡・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は、大地に埋まっている貴重な文化財という意味から「埋蔵文化財」といいますが、市内の至る所に悠久の歴史を物語るこの埋蔵文化財が眠っています。

現代に生きる私たちは、埋蔵文化財を大切にし、やむを得ず破壊される場合は、記録として 保存し、歴史を後世に引き継いでいく責任があります。

結びに、本調査にご指導とご協力をいただいた佐藤鎭雄先生、佐藤庄一先生をはじめとする 関係各位に、厚く感謝を申し上げます。

平成29年3月

南陽市教育委員会 教育長 猪 野 忠

本書は、置賜広域行政事務組合南陽消防署の整備事業に係る「沢田遺跡」の発掘調査報告書で ある。

既刊の概報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

## 調查要項

まれだ 沢田遺跡 遺 跡 名

昭和58年度登録 潰 跡 番 号

山形県南陽市若狭郷屋字駅西ほか 所 在 圳

調査主体 南陽市教育委員会

調查実施機関 南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係

調査期間 平成 27 年 5 月 27 日~ 6 月 12 日

調查担当者 社会教育課長 田中吉弘

> 社会教育課長補佐 角田朋行

(兼埋蔵文化財係長)

埋蔵文化財係 鈴木輝生

嘱 託 吉田江美子

報告書作成担当者 社会教育課長 佐藤賢一

社会教育課長補佐

角田朋行 (兼埋蔵文化財係長)

埋蔵文化財係 鈴木輝生

嘱 託 吉田江美子 山田 渚 岩瀬順子

調查指導 山形県教育庁文化財・生涯学習課 佐藤鎭雄 佐藤庄一

## 凡例

- 1 本書の執筆は、 Ⅰ・Ⅱは角田朋行、Ⅲ・Ⅳは吉田江美子、遺物写真撮影は山田渚が担 当した。
- 2 遺構図に付す高さは海抜高で表す。方位は真北を示す。
- 3 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

SK··・土坑 SP·・・ピット

ST・・・竪穴住居跡 RP・・・登録土器

- 4 遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。遺物実測図は 1/3 で採録して いる。
- 5 遺物番号について、本文中では以下の通り省略する。例)第  $15 \boxtimes 3 \rightarrow 15 3$
- 6 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 7 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議 事務局監修の「新版基準土色帖」によった。
- 8 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。(敬 称略)

佐藤鎭雄 佐藤庄一 阿部明彦 佐藤祐輔

## 目 次

I 調査の	の経緯 ····· 1
1 割	周査に至る経過・・・・・・・ 1
2 割	周査の概要・・・・・・・・1
Ⅱ 遺跡の	D立地と環境・・・・・・ 2
1 坩	b理的環境·····2
2 歴	<b>歴史的環境2</b>
Ⅲ 遺跡の	D概要····· 7
1 1	<b>倹出遺構7</b>
	出土遺物14
IV まと	<i>b</i> ······20
	図 版
第1図	南陽市遺跡位置図5
第2図	沢田遺跡調査位置図 … 6
第3図	沢田遺跡試掘トレンチ配置図 ・・・・・・・ 6
第4図	遺構配置図 8
第5図	S T 1 竪穴住居跡 · · · · · · 9
第6図	S T 2 竪穴住居跡断面図 ·····10
第7図	S T 2 竪穴住居跡 ·····11
第8図	S T 3 竪穴住居跡 · · · · · · · 12
第9図	S K 4 土坑 ······13
第 10 図	T T 1 S T 4 竪穴住居跡 · · · · · · · 13
第11図	T T 1 基本層序 · · · · · · · · 13
第 12 図	竪穴住居跡(1) 出土遺物15
第 13 図	竪穴住居跡(2)・遺構外 出土遺物16
第 14 図	遺構外(1) 出土遺物17
第 15 図	遺構外(2) 出土遺物18
第 16 図	沢田遺跡出土遺物21
第 17 図	南陽郡山遺跡群と沖郷条里22
	表
	6位置図・・・・・・・・4
	観察表19
	観察表 · · · · · · · 19
表 4 【参	考】 土器編年表23

## 写真図版

 巻頭写真 1
 S T 3 出土土器

 巻頭写真 2
 沢田遺跡完掘状況

写真図版 1 調査状況

 写真図版 3
 調査区検出状況

 写真図版 4
 S T 1 調査状況

写真図版 5 S T 2 · S K 4 調査状況

写真図版 6 ST3遺物出土状況 調査区完掘状況

写真図版7 ST1 · ST2完掘状況

写真図版 8 調査区完掘状況

写真図版 9 S T 1~3 出土遺物

写真図版 10 ST 2~3・SK 4 出土遺物

写真図版 11 遺構外 出土遺物

写真図版 12 遺構外・試掘トレンチ 出土遺物

写真図版 13試掘トレンチ出土遺物写真図版 14試掘トレンチ出土遺物

## I調査の経緯

### 1 調査に至る経過

沢田遺跡は南陽市の郡山地区及び島貫地区に所在する。遺跡内に置賜広域行政事務組合南陽消防署の新築計画が生じたことから、埋蔵文化財保護を図るための対応を実施した。

対象地を含む一帯は、平成2年に30 mメッシュで縦横1 mの試掘穴を設定のうえ試掘調査を実施しており、対象範囲からは、弥生時代、古墳時代及び平安時代の遺物が検出されている。その後、平成20年には防災センター整備に係る協議・調整が行われ、対象地は盛土のうえ駐車場を整備する計画であることから、慎重工事の対応がなされた。

平成 26 年度に新たに消防署の整備が計画されることになり、総合防災課と社会教育課との遺跡の保護に関する協議が実施された。現状保存を基本とし、従前の試掘成果を元に構造物の建設位置を調整し、可能な限り遺跡の保護を図ったが、やむを得ず工事により遺跡が破壊される範囲が生じる見込みとなったことから、遺跡の状況の確認と調査範囲の確認を行うため、平成 27 年 5 月初旬に市教育委員会が試掘調査を実施した。試掘により建設予定範囲内の一部で平安時代の遺物及び柱穴等の遺構が検出されたことから、記録保存範囲を決定し、引き続き市教育員会が本調査を実施した。

#### 2 調査の概要

調査は、事業地内 4,510㎡のうち、現状保存ができず、なおかつ遺跡保護層が確保できない範囲の約 320㎡を対象として、平成 27 年 5 月 27 日から 6 月 30 日を計画期間とし、本調査を実施した。

#### 平成 27 年

5月27日~ 重機による盛土除去

5月28日 グリット杭設置

5月28日 資材運搬、テント設営、環境整備

5月29日~ 粗掘り

6月1日~ 粗掘りと並行し、面整理 6月2日~ 竪穴住居、溝跡等を検出

6月4日~ 遺構検出状況等の写真記録

6月5日~ 柱穴等精査

6月8日~ 遺構掘下げ、記録、写真撮影

6月12日 全体清掃、完堀写真撮影、資材撤収



調査区完掘状況(東から)

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

沢田遺跡は、南陽市島費字沢田・字光角・字 阿弥花 前・字上西原・字渋田・字光質・字 阿弥花 前・字上西原・字渋田・字光 道 が 郡山字樋越・字中堀、若狭郷屋字石田・字樋 グ越に所在する。南陽市郡山のJR奥羽本線赤湯駅から西へ約270mの位置で、地目は宅地、畑地(果樹園)、水田となっている。沢田遺跡は、南流する吉野川によって形成された宮内扇状地の扇央部から扇端にあたり、吉野川旧河道左岸の自然堤防上及びその後背湿地に立地する。

本遺跡が所在する南陽市は山形県の南部にある米沢盆地の北に位置し、白鷹山山頂を北端とする東西 15 km・南北 24km三角形状の市域をなす。周囲は山々に囲まれ、東に奥羽山脈、南に吾妻連峰、北に白鷹丘陵、南西に飯豊連峰、北西に朝日連峰を望む。市の面積は、約 160k㎡で、北部の山地が 70%、南部の平地が 30%を占める。盆地特有の内陸型気候を示し、寒暖差が大きい。積雪も比較的多く、年間降水量は 1,500 mm前後を測る。

白鷹山系を源とする吉野川は、市内を北の丘陵地帯 から南の平野部へと貫流している。吉野川はかつては <sup>まをうち</sup> 宮内から沖郷に向かって南流し、平野部西側の漆山を 南流する織機川・上無川などと共に宮内複合扇状地を 形成し、宮崎付近で最上川に合流していた。現在は、 宮内から赤湯に向かって東南方向に流れ、高畠町から 西流する屋代川と合流した後に大橋付近で最上川に合 流している。各河川の流域には、流路沿いに自然堤防 の微高地が形成されており、吉野川流域では主に沖郷 の旧河道に沿って、宮内地区関口から沖郷地区宮崎ま でその両岸に自然堤防がほぼ連続して形成されてい る。織機川・上無川流域では、梨郷地区砂塚から沖郷 地区坂井まで河川の流路に沿って広範囲に自然堤防の 広がりがみられる。織機川・上無川流域の自然堤防で は粗砂(真砂土)の混入が多い砂質粘土の堆積が多く 見られる。

吉野川は現在遺跡の東側約 1,200 mを東南方向に流れるが、これまでの諸調査から古代における吉野川は、遺跡のすぐ西側を本流が南流し、遺跡の東側をそ

の支流が東南方向に流れていたと考えられる。

#### 2 歴史的環境

沢田遺跡の所在する南陽市では、平成28年度現在で288箇所の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺物出土例としては、長岡山丘陵に立 地する長岡山遺跡とその東側に位置する長岡山東遺跡 や稲荷森古墳があり、後期旧石器時代に属するとみら れるナイフ形石器が発見された。

縄文時代の遺跡は、市内に広く分布している。縄文草創期の遺跡は、北町遺跡、松沢遺跡、稲荷森古墳が知られ、有溝砥石等が出土している。早期から中期の遺跡は数が多い。早期の遺跡では、大野平遺跡、月ノ木B遺跡、上大作裏遺跡が発掘調査されている。前期の遺跡では総合公園内遺跡群が、中期の遺跡では長岡山遺跡、長岡山東遺跡、百刈田遺跡等で発掘調査が実施されている。後期・晩期の遺跡は、数が少なくなる傾向にあり、石畑遺跡、加藤屋敷遺跡、岩屋堂遺跡等で発掘調査が実施されている。近年の分布調査で中川地区川樋盆地の岩部山の岩陰から縄文時代の遺物が検出されている。

弥生時代の遺跡は、宮内扇状地の扇央部の旧吉野川沿いの自然堤防上に多く立地している。旧吉野川の上流から下流へ、沢見遺跡、中期の円田式や後期の天王山式並行の土器が出土した沢田遺跡、中期の土器と石包丁が採集された萩生田遺跡と続き、さらに 1 km下流の百刈田遺跡(高桑・佐藤 2010)では、十数基の中期の再葬墓が確認されている。織機川沿いでは、中期の円田式の土器が採集された東富堰遺跡や大仏遺跡、中期の桜井式の土器が採集された掛在家遺跡、後期の竪穴住居が発見された庚壇遺跡(押切・須賀井2007)等が知られ、扇状地中央部の自然堤防を中心に弥生時代の集落が展開していたものと思われる。また、上野山山頂岩陰や岩部山岩陰から弥生土器片が見つかり、祭祀等に利用された可能性があるが決定的な資料は出土してない(佐藤・佐藤 1987)。

古墳時代の遺跡は、旧吉野川や織機川沿いの自然堤 防上、長岡山丘陵などの独立丘陵上、扇状地の北東部、 東部、西部の丘陵の尾根や斜面に立地し、飛鳥~奈良 時代の終末期古墳も宮内扇状地北東に位置する山々の 枝尾根の南斜面に分布している。

古墳は、平成27年度現在で終末期古墳を含め116 基の存在が確認されており、古墳が54基、方形周溝 墓24 基、終末期古墳38 基となっている。前期の古 墳では、前方後方墳の蒲生田山3号墳・4号墳と前 方後円墳の蒲生田山2号墳、方墳もしくは方形周溝 墓が十余基確認された大塚遺跡(氏家・吉田 2010)、 円墳が3基確認された天王遺跡(高橋・小林2010)、 長岡山遺跡で4基の方形周溝墓が確認されている(山 田・吉田 2013)。 4世紀後半に築かれた県内最大の 前方後円墳の稲荷森古墳は国指定史跡となっている。 5世紀代には、経塚山古墳群、天王山古墳群、稲荷山 古墳群、竜樹山古墳群が扇状地西部の山々の尾根に築 かれ (角田 2016)、平野部では宮崎地区の植木場一遺 跡で5世紀中頃の円墳が確認されている(高橋敏ほか 1998)。大谷地東側の松沢赤石山の急斜面に立地する 松沢古墳群は、5世紀末~6世紀前半の合掌型石室を 持つ積石塚古墳である(佐藤・佐藤 1987)。集落は、 旧吉野川沿いの自然堤防上に立地する沢田遺跡、百刈 田遺跡や鍋田の寺田遺跡等、沖郷地区を中心として広 い範囲に存在したと考えられる。近年の調査から中川 地区川樋では、岩屋堂遺跡周辺に古墳時代の遺跡があ るとみられる。

奈良~平安時代の遺跡は、主に宮内扇状地の自然堤 防上に立地し、唐越遺跡、清水上遺跡、中落合遺跡、 沢田遺跡、庚壇遺跡、檜原遺跡、西中上遺跡、矢ノ目 館跡、沢口遺跡、植木場一遺跡、富貴田遺跡や宮内扇 状地北西部の丘陵地に立地する平野古窯などが確認さ

れており、発掘調査が実施された遺跡も多い。奈良 ~時代に南陽市一帯は赤井郷・宮城郷と呼ばれ、「郡 山」という地名から沖郷地区には古代置賜郡衙があっ たとみられている。郡庁の所在地は未確認であるが、 沢田遺跡を中心に郡山遺跡群と称される濃密な遺跡 群が広がり、周辺に広く条里制が推定できることか ら、郡庁はこの周辺に存在したと考えられている。中 落合遺跡の発掘調査では区画施設を有する建物群が検 出され、置賜郡衙の関連施設とみられる(氏家・髙桑 2007)。郡山周辺は小河川が鳥足状に流れ、その間に 微高地が点在する地形となっていることや広範囲に広 がる遺跡の状況から郡衙機能を分散配置している可能 性もある。中落合遺跡や唐越遺跡では、条里制の区画 に影響された遺構配置が見られ、沢見遺跡や西原遺跡 等からは条里制水田の区画に関連するとみられる溝跡 が確認されている。また、現在の赤湯駅近辺を流れる 堰を厨川と呼び、古代からの水路とみられる(佐藤 2010)

中世の遺跡では、多くの城館跡が確認されている。 最上氏と伊達氏、上杉氏の領国の境にあたる吉野地 区、中川地区の街道沿いに特に城館跡が多い。宮内 扇状地内でも自然堤防上や北部の山地との境付近に 多くの城館跡が立地している。旧吉野川の両岸には、 蒲生田館、若狭郷屋屋敷、中屋敷、中落合館等が立地 し、独立丘陵上には、長岡山館、椚塚館等が立地して いる。扇端部を流れる最上川沿いには、大橋城、畿内 城、宮崎館、梨郷南館等が立地している。山沿いでは、 二色根館、金山楯山館、石切山城、宮沢城、漆山館、 が完成した。 片岸館、梨郷上館等が立地している。発掘調査が実施 された遺跡としては、単郭方形館と考えられる屋敷跡 を検出した鵜ノ木館跡(石井・鈴木 2006)や方形館 を検出した天王遺跡等がある。

#### 引用・参考文献

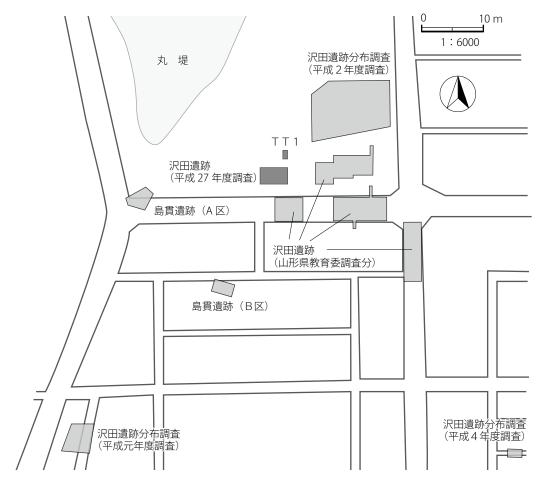
佐藤鎭雄•佐藤庄一 1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市史編さん委員会 石井浩幸 • 鈴木広偉 2006 「鵜の木館跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 150 集 氏家信行・吉田江美子 2007 「大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 158 集 氏家信行・髙桑弘美 2008 「中落合遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集 押切智紀 • 須賀井明子 2007 「庚壇遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集 佐藤鎭雄 2010 「置賜郡の官衙関連遺跡」『平安初頭の南出羽考古学』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 髙桑弘美・佐藤祐輔ほか 2010 「百刈田遺跡第1~4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 184集 高橋一彦・小林克也 2010 「天王遺跡」遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 186 集 高橋 敏ほか 1998 「植木場一遺跡」遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集 2016 「南陽市遺跡分布調査報告書(3)」南陽市埋蔵文化財調査報告書第11集 角田朋行 2016 「南陽市遺跡分布調査報告書(4)」南陽市埋蔵文化財調査報告書第13集 角田朋行 山田 渚・吉田江美子 2013 「長岡山遺跡・長岡山東遺跡調査報告書」南陽市埋蔵文化財調査報告書第7集

## 表 1 遺跡位置図

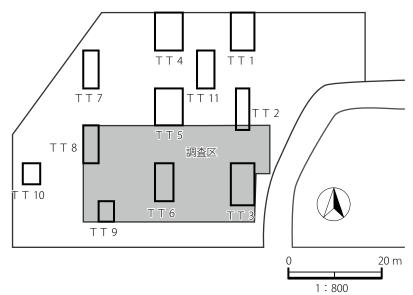
<b>₩</b> □	'보 마 <i>시</i>	廷 Dil	n± /L	W -	'보 마 <i>시</i>	年 DI	吐 /
	遺跡名	種別	時代		遺跡名	種別	時代
1	沢田	集落跡	奈良~平安	59	北前	散布地	縄文
2	宮沢城	館、城館	中世	60	長瀞館	館	中世
3	宮内南館	館	中世	61	梅ノ木	散布地	奈良~平安
4	慶海山館	館	中世	62	井戸尻	散布地	奈良~平安
5	双松公園内	散布地	縄文・奈良~平安	63	西畑	散布地	平安
6	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文・平安	64	馬ノ墓	散布地・古墳	古墳・奈良~平安
7	久保	集落跡	縄文	65	大塚	古墳・集落跡	縄・古・奈~平
8	宮内小学校敷地内	集落跡	縄文	66	西中上	集落跡	奈良~平安
9	別所館	館	中世	67	将監屋敷	散布地	奈良~平安
10	別所山経塚	経塚	平安(保延6年)	68	長割	散布地	古墳
11	別所 B	散布地	縄文	69	中里	散布地	奈良~平安
12	別所 A	散布地	平安	70	上河原	散布地	平安
13	丸山館	館	中世	71	島貫	集落跡	奈良~平安
14	東屋敷	散布地	奈良・平安	72	唐越	集落跡	縄文・奈良~平安
15	東髙堰	散布地	弥生	73	前畑	散布地	平安
16	富貴田	集落跡	縄文・奈良~平安	74	西原東	集落跡	奈良~平安
		館	中世	75	沢口	集落跡	奈良~平安
		散布地	縄文・奈良~平安	76	間々ノ上	散布地	奈良
	大清水	馬場	中世	77	諏訪前	古墳・集落跡	縄文・古墳・平安
	大河水	馬場 散布地	縄文・平安	78	戦の削 矢ノ目館	集落跡・館	たまでは、 一種文・古頃・平女 一奈良~平安・中世
21	久根崎	集落跡	縄文	79	東六角	散布地	縄文・平安
22	源兵平	散布地	縄文・平安	80	早稲田	散布地	奈良
23	源兵工山	散布地	縄文・古墳	81	李の木	包蔵地	平安
24	内原三	散布地・古墳	古墳	82	椚塚館	館	中世
	蒲生田山古墳	古墳	古墳	83	椚塚館ノ山	集落跡・館	縄文・中世
	山居沢山 D	包蔵地	平安	84	冨塚	散布地	古墳
	山居沢山 B	古墳	古墳	85	沖田館	館	中世
28	山居沢山 A	散布地	平安	86	沖田	散布地	平安
29	清水上	墳墓・集落跡	古墳・平安	87	前小屋	散布地	縄文
30	蒲生田館	館跡	中世	88	百刈田	集落跡・墓跡	縄・弥・古・奈~平・中・近
31	蒲生田館南	散布地	縄文・奈良~平安	89	長岡山	集落跡	石・縄・古・奈~平
32	当時作	散布地	縄文・平安	90	長岡館	館	中世
33	観音堂	散布地	縄文・平安	91	稲荷森古墳	散布地・古墳	旧石・縄・古・平
34	上野	集落跡	縄文・平安・中〜近世	92	長岡西田	散布地	縄文
35	狸沢山古墳群B支群	古墳	弥生・古墳	93	長岡山東	散布地	縄文・古墳・平安
	上野山古墳群	古墳	弥生・古墳	94	長岡南森	散布地	縄文・古墳・平安
	<b>庚</b> 壇	集落跡	縄・弥・古・奈~平	95	中ノ目下	散布地	奈良~平安
	木之実小屋	散布地	奈良~平安	96	内城館	館	中世
	東弁天	散布地	縄文		鵜ノ木館跡		古墳・平安・中~近世
	檜原	散布地	平安		態の前館	館	中世
41	中落合	古墳・集落地	古墳・奈良~平安		水上	散布地	奈良・平安
	中落合館	館	中世		太子堂	散布地	平安
	萩生田	塩 集落跡・散布地	弥生・奈良		柳町	集落跡	中世
	若狭郷屋屋敷	館	中世		桜田	集落跡	平安
	中屋敷	散布地	奈良~平安		内原七	散布地	縄文
46		散布地	縄文・奈良・平安		狸沢山古墳群A支群	古墳	弥生・古墳・奈良
47	東唐越館	館 #4 + + + + + + + + + + + + + + + + + +	中世		北ノ沢山	散布地	奈良・平安
48	横沢	散布地	縄文・奈良		上野山古墳群大沢山支群		奈良
	二色根館	館	中世		上野山古墳群長峰山支群	- ^	奈良
	二色根古墳群	古墳	古墳		高木	集落跡	奈良・平安
	中野山館	館	中世		東ノ北	散布地	奈良・平安
	上野山館	館	中世		樋ノ口	散布地	奈良・平安
	烏帽子山古墳	古墳	古墳		沢見	散布地	奈良・平安
54	烏帽子山経塚	経塚	平安	112	町河原	散布地	奈良・平安
55	上ノ山	散布地	縄文	113	稲荷	散布地	平安
56	稲荷前	散布地	縄文	114	郡山中堀	散布地	奈良・平安
57	夷平	散布地	縄文・中世	115	山居沢山C	散布地	縄文
	北町	散布地	縄文	116	久保田尻	散布地	平安
					<del>-</del>	_	



(国土地理院発行2万5千分の1地形図「赤湯」使用) 第1図 南陽市遺跡位置図



第2図 沢田遺跡調査位置図



第3図 沢田遺跡試掘トレンチ配置図

## Ⅲ遺跡の概要

#### 1 検出遺構

沢田遺跡平成27年度調査区はJR奥羽本線の赤湯駅から直線距離で西へ約270mの地点に位置する。標高は221m前後である。周辺を住宅地と畑地に囲まれ、西側には旧吉野川を堰き止め造った「丸堤」がある。

今回の調査で、主な遺構として、竪穴住居跡 4 棟、 土坑 1 基、ピット数基が確認された。

なお、遺構個別の規模・方向などの詳細は遺構観察 表2に記載し、本文中では省略する。

#### 竪穴住居跡

本調査では4棟の竪穴住居跡が検出されたが、面掘り調査区で3棟、トレンチ調査部分で1棟検出された。 建物軸の方向にはばらつきがある。

#### ST1 (第5図)

南東-北西方向に長方形の竪穴住居跡である。遺構は全体的に特に南方向の削平が顕著で、また西側隅が調査区外にあると思われる。北側角壁面に近い床面と、壁面から延びる浅い溝状の遺構の床面には焼土が確認され、カマドと煙道の跡と思われる。

遺構の覆土は第6図の断面図のとおり $10 \sim 20cm$ 程度と削平が著しく、図化できた出土遺物は須恵器坏(12-1)の1点のみである。

#### ST2 (第7図)

南側7度に傾く台形に近い竪穴住居である。ST 1と同様に煙道が東方向に延びているためカマドは東 壁に位置したと思われるが、削平されたのかカマド本 体や焼土などの痕跡は検出できなかった。

第7図の断面図のとおり、遺構の覆土は  $10 \sim 20$  cm程度と削平が著しい。図化できた出土遺物は須恵器 坏 2 点  $(12-2\cdot3)$ 、土師器壺 (か?) 底部 1 点 (12-4) である。

#### ST3 (第8図)

遺構の大半が削平されていることや、調査区外にあることから全体像は不明であるが、建物はほぼ真北を軸とし、南壁にカマドおよび煙道と思われる部分が残っている。カマドについて、袖部などは削平されているものの、煙道内には焼土が確認された。

遺物は比較的良好な状態で出土し、カマド周辺の床面から須恵器坏(13-1)、土師器甕(12-6)、土師器小甕(12-7)、この他遺構内の覆土には古墳時代の壺の底部(13-2)などが混入している。

#### トレンチ調査部分(TT1) ST4(第10図)

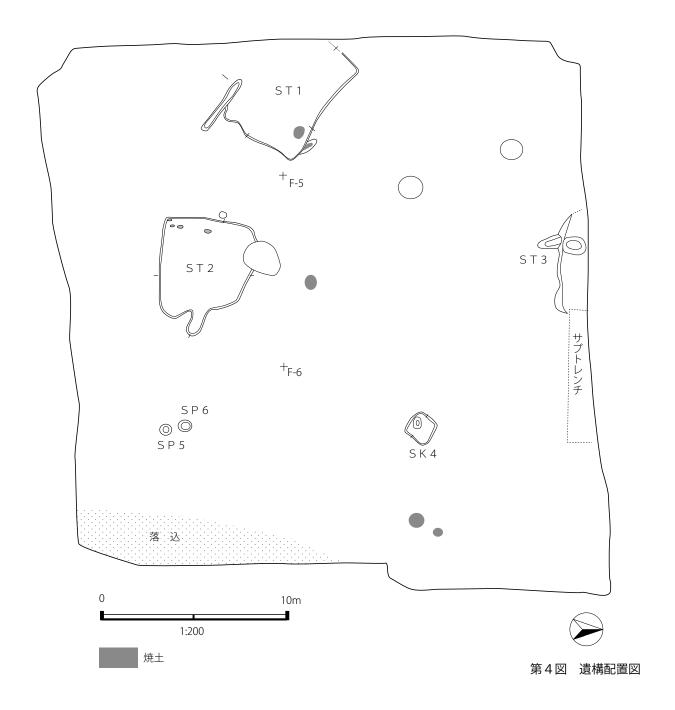
試掘トレンチTT1から竪穴住居跡1棟の西角部分が確認された。南西部分辺にはカマドの痕跡と思われる焼土、貯蔵穴と思われる土坑と内部には土師器の小型甕(14-9)、そしてその脇には土師器の長胴甕(14-10)が良好な状態で出土した。しかし、東半がトレンチ外であること、遺構の深さ10cm以下と削平が著しく、遺構の規模・方向などの詳細は不明である。なお、西角には柱穴と思われるピットが存在する。

#### その他の遺構

#### 土坑 (第9図)

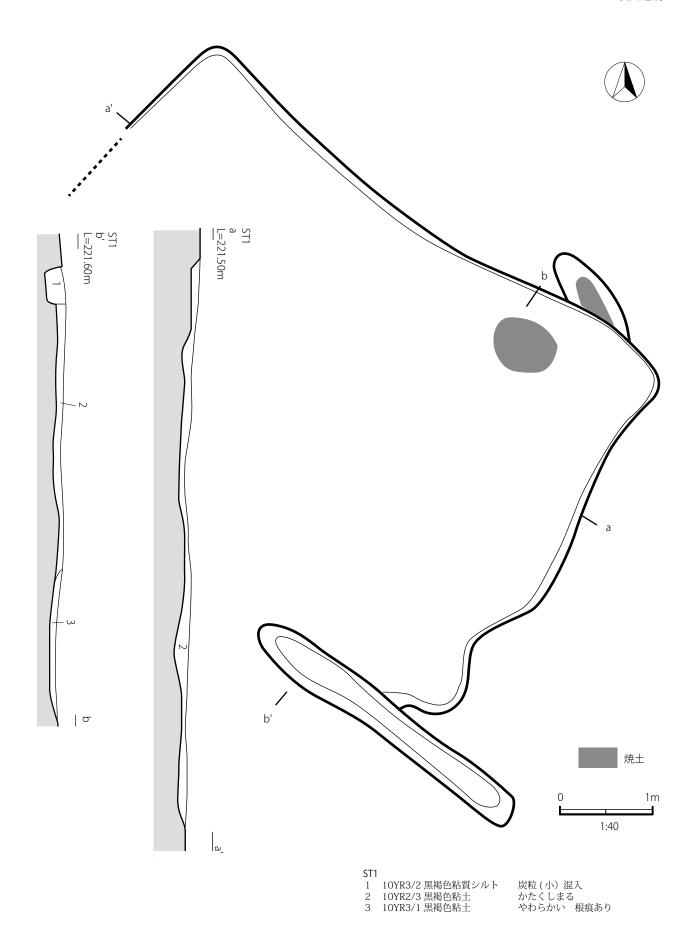
本調査では数基の土坑を確認したが、遺構とみられるものは S K 4 の 1 基のみで、残りは後世の攪乱とみられる。

S К 4 は隅丸方形の形状を呈し、西側底部に円形のくぼみがある。深さは  $10 \sim 15$  cm で著しい削平を受けたと思われる。土層断面を観察すると西側が細かい層状で、東側には木柱の痕跡がみられる。これらの状況から単独の検出であるが、掘立柱建物跡などの柱穴のうちの 1 基と推測される。遺構内からは須恵器坏( $13-4\cdot5$ )、双耳坏(13-6)が出土している。



#### 落込部分(第4図)

調査区東側に落込みと思われる部分が確認された。 落込みからは調査期間中も湧水がみられたことから旧 河川跡と推測される。覆土からは弥生・古墳・奈良~ 平安時代の土器の破片などが出土し(13 - 7 ~ 13)、 これらの遺物は層位に関係なく出土したことから、後 世の流れ込みと思われる。



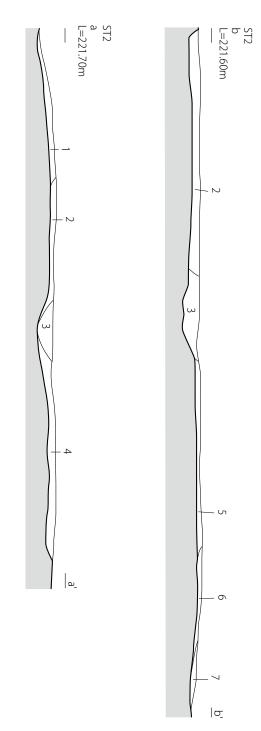
第5図 ST1 竪穴住居跡

ST2 2.5Y3/2 黒褐色粘土 10YR2/2 黒褐色粘土 10YR3/2 黒褐色粘土 10YR4/2 灰黄褐色粘土 10YR4/2 灰黄褐色粘土 10YR4/1 褐灰色粘土 10YR4/2 灰黄褐色 かたくしまる 炭粒 (大) 多量混入 かたくしまる かたくしまる 土師器多量混入 かたくしまる 土器粒少量混入 かたくしまる 炭粒 (大) 少量混入 かたくしまる かたくしまる 3 4 5 6 7



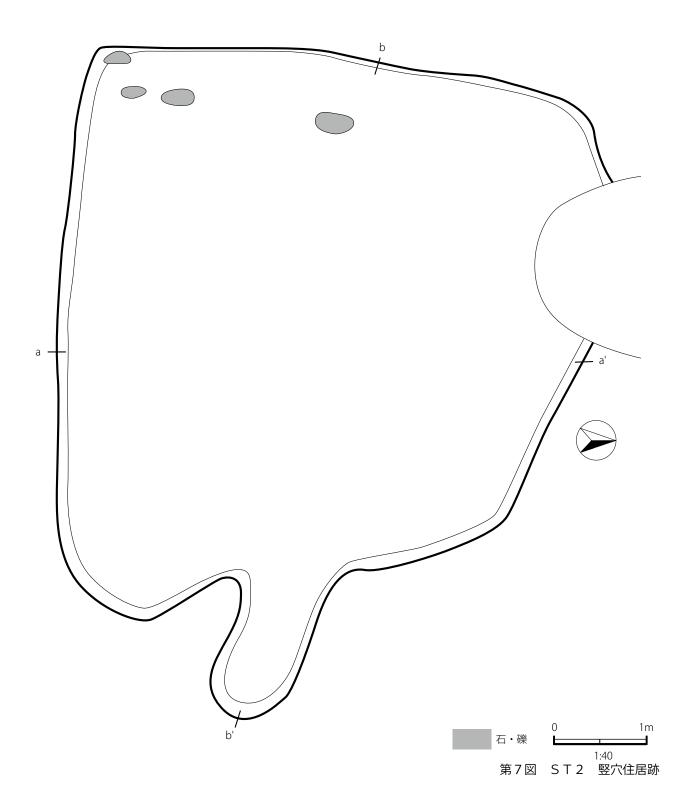


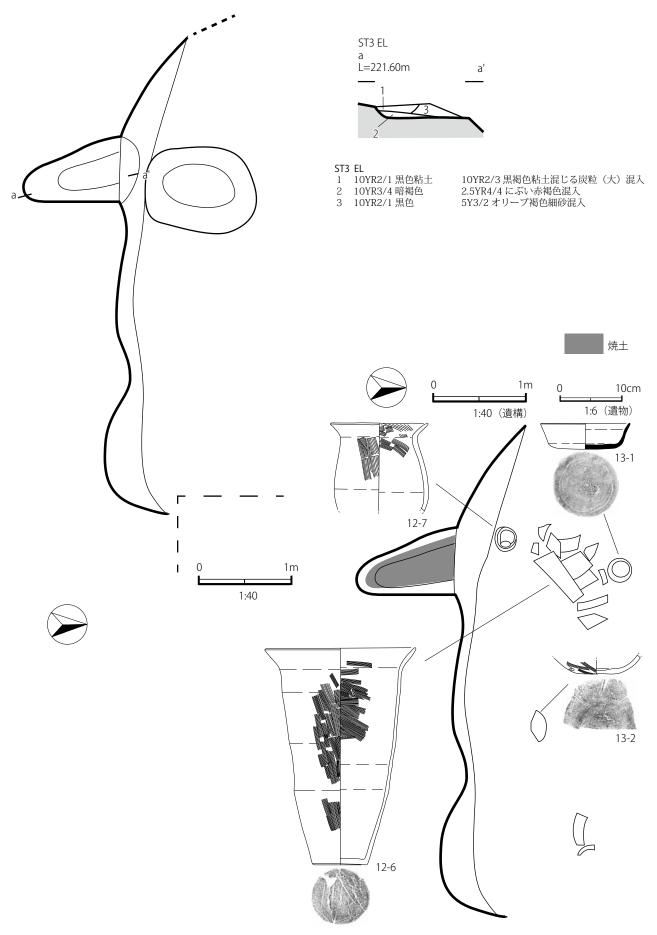
ST2調査状況(西から)



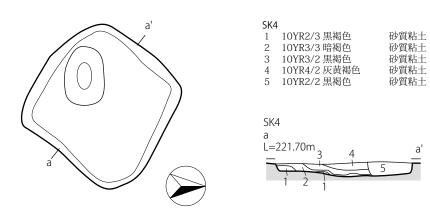


第6図 ST2 竪穴住居跡断面図



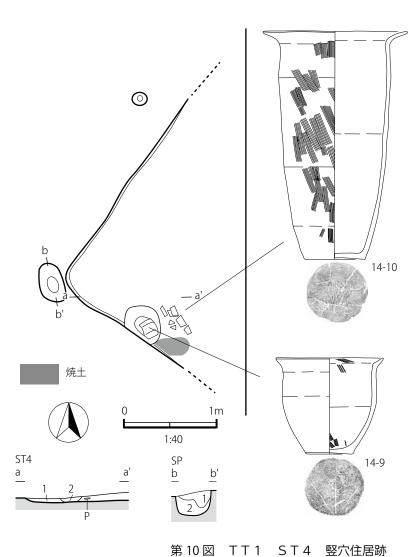


第8図 ST3 竪穴住居跡





第9図 SK4 土坑



TT1 ST4 a-a'

10YR3/3 暗褐色粘土 かたくしまる

2 10YR3/1 黒褐色粘土

TT1 SP b-b' 1 10YR2/3 黒褐色粘質シルト かたくしまる 土器粒混入

2 10YR2/1 黒色粘質シルト やわらかい



V V V

#### 基本層序

I 10YR4/4 褐色粘質土 II 10YR4/4 褐色粘質土 III 10YR4/4 褐色粘質土 III 10YR3/2 黒褐色 土器粒・炭粒混入 炭粒混入 かたくしまる 粘土

第11図 TT1 基本層序

#### 2 出土遺物

本遺跡より出土した土器は奈良・平安時代(8~9世紀)が中心であるが、縄文土器・弥生土器・古墳時代の土器も出土していることから間欠的に人々が生活を営んでいたとみられるものの、後世に大きく削平されている。

#### (1) 縄文時代

縄文時代中期のものと思われる破片が遺構外から1点(15-1)出土している。鉢形土器の口縁部の渦巻き文様の突起部分と思われ、上部には細串による沈線文様が施されている。欠損が著しく詳細は不明だが、形状から大木8式と思われる。同様の土器は南陽市長岡山遺跡・長岡山東遺跡(山田・吉田2013)から出土している。

#### (2) 弥生時代

弥生時代中期末~後期のものとみられる土器が出土している。東側落込み部分では器種は不明であるが、縄目と沈線を施文した弥生時代後期のもの(13-7・8)が出土している (tall)。

また試掘トレンチにおいても 2 本 1 組の並行沈線の破片(14-6)が出土している。これは南陽市百刈田遺跡(高桑・佐藤 2010)の次段階(弥生時代中期末)に属するものとみられる  $^{(\pm 1)}$ 。また外面に縄文が施文された土器(14-7)が出土している。器種不明としておくが、口縁は疑似口縁として加工した、深い容器を皿として転用したものと考えられる。土器の時期は弥生時代後期とみられる  $^{(\pm 2)}$ 。

#### (3) 古墳時代

遺構から出土した遺物は僅少であるが、古墳時代前期と思われるものが数点出土している。土師器の丸底壺、甕、塊、高坏が中心で、そのほとんどが調査区西側の落込み部分からの出土である。しかし遺構であるST3からも土師器の丸底壺(か?)(13-2)と、甕の体部と思われる部分(13-3)の2点が出土しているが後世の攪乱による混入と思われる。

遺構外遺物について、13-9は埦で、口縁部内部 に稜があり口唇部は小さなつまみ出しがある。13 -10 は高坏の坏部もしくは埦と思われる。脚部の痕跡 は不明であるが、底部付近および中間部分に稜があ り、やや内湾気味の形状であることから高坏の可能性 が高い。13-11は高坏の坏部で、内面は磨滅が顕 著だが外面にはミガキおよび赤色加工の痕跡が残る。 形状は下部に稜があり口縁は斜め上に直行すると思わ れる。これらは完形ではないため詳細は不明であるが 古墳時代前期に属すると思われる。13 - 12 は小型 丸底壺の底部と思われ、底部にはケズリによるくぼみ が形成されている。全体の形状は不明であるものの、 古墳時代前期に属すると思われる。13 - 13 は壺も しくは甕の口縁部で、有段の複合口縁であるが、破片 のため年代は不明とする。13-14・15は明確な器 種は不明だが、台付甕の脚部ではないかと思われる。 この2点は内外面ともに磨滅や火はねが著しく、特に 13-14の外面にはススが付着している。

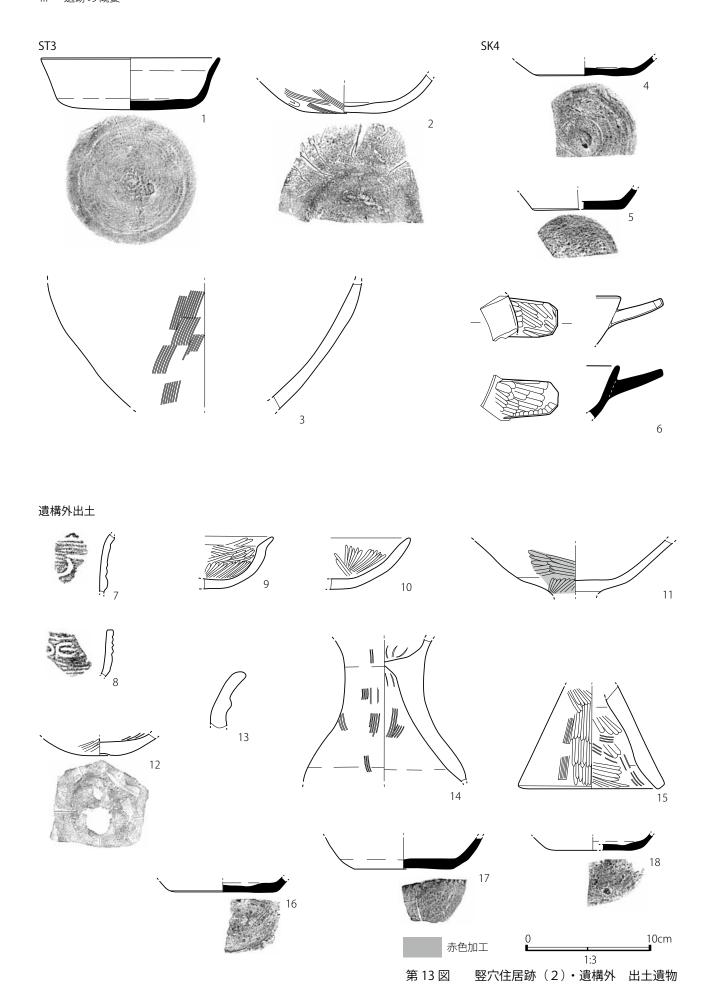
試掘トレンチ出土遺物について、埦(15-2・3) 甕(15-5)が出土している。15-2は内外面とも にミガキ調整で無段口縁の丸底埦と思われる。また 15-3は口縁が有段で、比較的大型の埦とみられる。 外面はハケメ、内面はミガキ調整である。2点とも古 墳時代前期と思われる。15-5の甕は底部を欠損し ているが、体部はやや横長の球形を呈し、外面にはハケメ調整が、内面は磨滅している。頸部は「く」の字 状にくびれが鋭角的で、口縁部は斜め上に直行する単 純口縁である。古墳時代前期とみられるがやや古い印 象があり前期前半に属する可能性がある。15-5は 丸底壺底部で外面にはハケメ調整が行われている。古 墳時代前期のものと思われる。

#### (4)古代

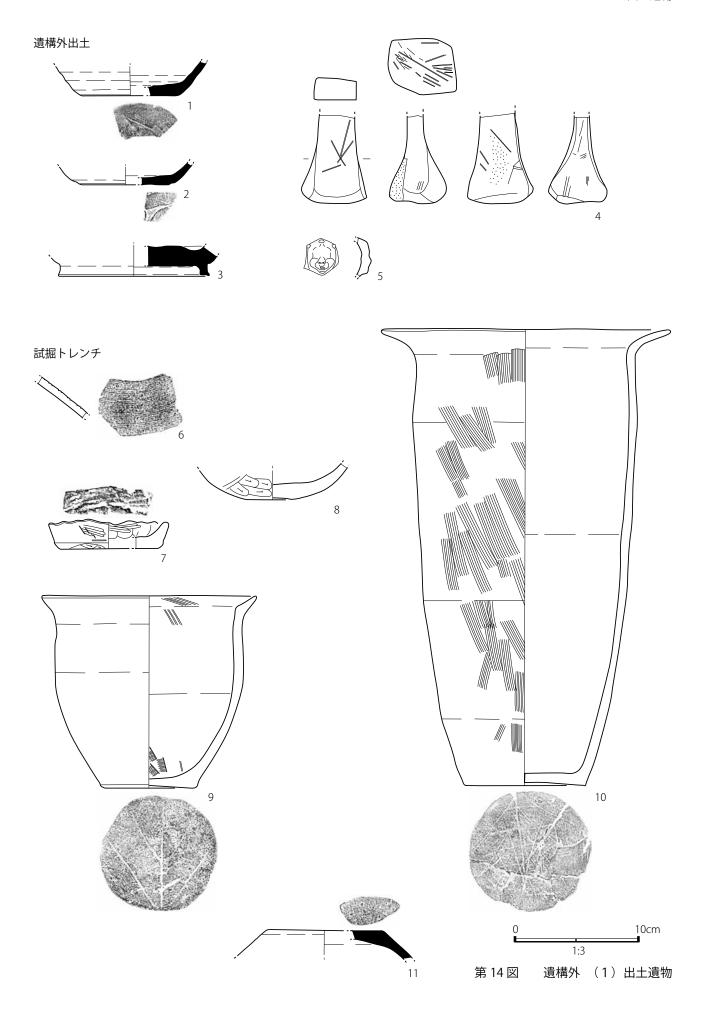
奈良~平安時代の須恵器坏・蓋・壺(?)、土師器 甕が出土している。

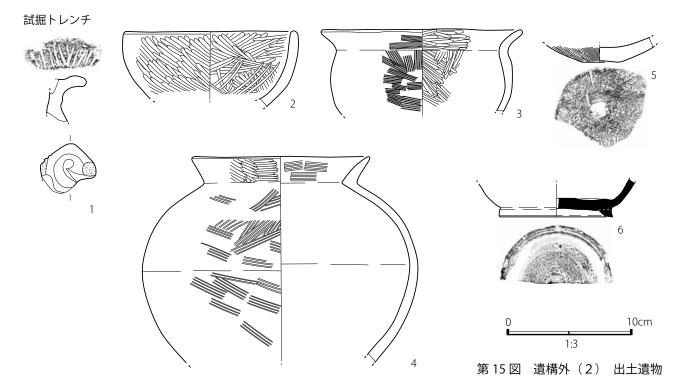
ST1からは須恵器坏 (12-1) が 1 点、ST2 からは須恵器坏 2 点  $(12-2\cdot3)$ 、ST3からは須恵器坏 1 点 (13-1)、土師器の長胴甕が 2 点  $(12-5\cdot6)$ 、小甕が 1 点 (12-7) が出土している。SK4から須恵器坏 2 点  $(13-4\cdot5)$ 、双耳坏の





16





破片が1点(13-6)出土した。また試掘トレンチ内の竪穴住居跡からは土師器の長胴甕が1点(14-10)、小甕1点(14-9)、須恵器の蓋が1点(14-11)出土している。

ST3出土の坏(13-1)は底部回転へラ切で坏の箱型の形状であることから8世紀第 $2\sim3$ 四半期頃に属すると思われる。 $13-4\cdot5$ 、14-1、の須恵器坏について、底部は回転へラ切で、形状からも鑑みて8世紀第4四半期頃に属すると思われる。14-3については前記4点より新しい9世紀代のものと思われる。

試掘トレンチ内ST4出土の須恵器蓋(14-11)についても上部が回転ヘラ切と見られることから8世紀第4四半期と思われる。遺構外出土の須恵器坏(14-2)は底部切離しが回転糸切であることと形状から9世紀前半に属するとみられる。

土師器の長胴甕は全体的に胴にふくらみがなく、特にST3出土の12-6、試掘トレンチ出土の14-10は細長い形状の印象が強い。また火はねなどの使用痕が顕著である。そして、小甕がST3と試掘トレンチ内の竪穴住居のカマド近くから出土している。長胴甕とともにカマド周辺から出土していることからセット関係の可能性も考えられる。

SK4から出土した須恵器坏は全体の形状は不明

だが底部切離しは回転へラ切であることから、9世紀第1四半期までの範疇にあると思われる。また双耳 坏 (13-6) も同様の時期とみられる。

遺構外出土の須恵器について、 $13-16\sim18$  の 3 点が出土しているがいずれも回転へラ切の底部でヘラケズリ調整が施されている。13-16 は底部が広く 8 世紀第  $2\sim3$  四半期頃、13-17 は 9 世紀第 1 四半期頃、13-18 は 8 世紀第 4 四半期~ 9 世紀第 1 四半期に属するのではないかと思われる。また試掘トレンチから出土した須恵器瓶もしくは壺の底部(15-6)については判断材料が乏しく時期不明とする。

#### 註

- 1)佐藤祐輔氏のご教示による。
- 2) 阿部明彦氏のご教示による。

### 表 2 遺構観察表

遺構No.	遺構種類	方向軸	長辺(m)	短辺(m)	カマド方向	備	考
ST1	竪穴住居跡	$N - 47^{\circ} - E$	6.3	4.5	NW?		
ST2	竪穴住居跡	N - 5°-E	6.0	5.7	Е		
S T 3	竪穴住居跡	N	5.0	-	S		
S T 4	竪穴住居跡	不明	不明	不明	SE?		

#### 表 3 遺物観察表

版	挿図	14 DU	00 12	登録	Ē-	測値	(mm)				調整技	技法			出土	***	±
号:	番号	種別	器 種	番号	口径	底径	器高	器厚	外	面	内		底	部	地点	備	考
	1	須恵器	坏	-	-	(80)	-	5	ロクロ		ロクロ		ケズリ		ST1F	底部切離し後ナデ	調整
	2	須恵器	坏	-	(130)	(76)	40	5	ロクロ		ロクロ		回転へ	ラ切	ST2F	底部切離し後ナデ	調整
	3	須恵器	坏	-	-	(70)	-	4	ロクロ		ロクロ		-		ST2F		
2	4	土師器	小型壺	-	-	(26)	-	8	ミガキ・	・ハケ	ミガキ	• ハケ	ナデ		ST2F	赤色粒混入	
	5	須恵器	甕	-	-	(104)	-	7	ハケ		ハケ		木葉痕		ST3	磨滅顕著	
	6	須恵器	甕	RP2	(240)	90	347	4	ハケ		ハケ		木葉痕		ST3Y		
	7	須恵器	丸底壺	RP1	154	-	-	7	ハケ		ハケ		-		ST3Y	焼成不良	
	1	須恵器	坏	RP4	142	110	41	4	ロクロ		ロクロ		回転へ	ラ切	ST3Y	底部調整	
	2	土師器	壺	RP3	-	(74)	-	6	ケズリ・	・ハケ	不明		ケズリ		ST3Y		
	3	須恵器	壺 or 甕	-	-	-	-	9	ハケ		不明		-		ST3		
	4	須恵器	坏	-	-	(76)	-	6	ロクロ		ロクロ		回転へ	ラ切	SK4		
	5	須恵器	坏	-	-	(70)	-	5	ロクロ		ミガキ		回転へ	ラ切	SK4	底部ナデ調整	
	6	須恵器	双耳坏	-	-	-	_	5	ロクロ・	・ミガキ	ミガキ	・ミガキ	-		SK4		
	7	弥生土器	不明	-	-	-	-	5	-		-		-		F-6G		
	8	弥生土器	不明	-	-	-	-	5	-		-		-		F-6G		
	9	土師器	坏	-	-	-	_	7	ミガキ		ミガキ		不明		F-6G		
3 -	10	土師器	坏 or 高坏	-		_	_	7	ミガキ		ミガキ		不明		F-5G		
	11	土師器	高坏	-	_	_	_	7	ミガキ		不明		-		F-6G	外面赤色加工残る	
		土師器	丸底壺	_	_	28	_		ミガキ		ハケ		ケズリ		F-6G		
		土師器	甕 or 壺	_	_	_	_		不明		不明		-		F-6G	有段の口縁か?	
		土師器	不明	-	_	_	_		ハケ		ハケ		_		F-6G	台付甕脚部か?	
	15	土師器	不明	-	_	(114)	_	13	ミガキ・	・ハケ	ミガキ		-		E-6G	台付甕脚部か?	
	16	須恵器	坏	-	_	(80)	_	5	ロクロ		ロクロ		ケズリ		E-6G		
		須恵器	坏	-	_	(80)	_	5	ロクロ		ロクロ		回転へ	ラ切	F-6G	ユビナデ調整 底	部にヘラ書き「
	18	須恵器	坏	_	_	(72)	_	3	ロクロ		ロクロ		ケズリ		E-6G		
		須恵器	坏	_	_	(80)	_		ロクロ		ロクロ		ケズリ		E-6G		
		須恵器	 坏	_	_	(70)	_		ロクロ		ロクロ		回転糸	切	E-6G		
		須恵器	壺?	_	_	(120)	_		ロクロ		ロクロ		不明	,,	E-6G		
		石製品	砥石	_	53	45			-		-		-		E-6G		
		陶器	不明	_	-	_	_	7	_		_		_		F-5G		
4			不明	_		_			ミガキ	?	ハケ?		_		TT1	外面並行沈線文様	
-			不明	_	(96)	(80)	22				ミガキ	· 7 Ľ	_		TT3	外面縄目文様	
		土師器	丸底壺?	_	-	28			ケズリ	,,,,	不明		_		TT1	712000	
		土師器	小型甕	P1	(172)	94			不明		ハケ		_		ST4	外面磨滅顕著	
		土師器	甕		(230)	96			ロクロ		ロクロ		-		ST4		
		須恵器	蓋	_	(230)	(90)	-		ロクロ		ロクロ		_		TT1		
		縄文土器	不明	_	_	-		10			-		_		TT3	□縁部の一部か	上面に刻みあり
		土師器	埦	_	(140)	_			ミガキ		ミガキ		_		TT2	ENSONAIT-2 HPV	
		土師器	埦	_	(160)	_			ハケ		ミガキ		_		TT2	使用痕あり	
5 -		土師器	壺	_	(140)	_			ハケ		ハケ		_		TT2	( COM(1) ( )	
		土師器	专	_	(140)	(16)			ハケ		 不明		ケズリ		TT2		
		須恵器	高台坏						ロクロ		ロクロ		回転へ		TT6		

## Ⅳ ま と め

沢田遺跡は「郡山遺跡群」と呼ばれる遺跡のひとつであり、南流する吉野川と織機川の旧河川道によって形成された宮内扇状地の扇央部から扇端部にあたり、旧吉野川の河岸段丘から後背湿地の部分にあたる。沢田遺跡はこれまでも開発にともない山形県教育委員会が昭和58年に試掘調査を、59年に緊急発掘調査を行い(佐藤・名和1985)、その後も南陽市教育委員会が平成元年、2年、4年に調査を行っている(吉田ほか2013)。ここでは今回の平成27年度発掘調査に過去の調査結果を加えながら沢田遺跡について考察したい。

#### 平成 27 年度調査

平成27年度発掘調査は沢田遺跡内に建設される新消防署建物部分となる約320㎡の範囲での調査であり、沢田遺跡の範囲と想定される西端付近である。その調査範囲内において竪穴住居跡3棟、柱穴1基が確認され、これらは集落跡の一部と推測される。いずれも削平が顕著で竪穴住居跡のが深さ10cm前後とほぼ床面直上に近い部分しか確認できない状況であった。しかし僅かながらも年代の特定が可能な遺物が遺構から出土し、概ね8世紀後半から9世紀前半に存在した集落跡と推定できる。また試掘トレンチTT1で確認された竪穴住居跡もその集落の一部であろう。

今回の調査で特に注目すべきはST3(第9図)で、 北側の大半は調査区外で、カマドと煙道も大きく削平 されているものの、8世紀中頃の須恵器坏・土師器甕・ 小甕のセットが比較的良好な状態で出土している。ま たこの遺構からは古墳時代前期の土師器が出土してい るが後世の攪乱による混じり込みと思われる。そし て、遺構はほぼ真南方向を向き、カマドおよび煙道は 南壁に設置されている。

今回の調査では第4図のとおり遺構の重複が見られないので、遺物の年代観による検証の上でこれらの竪穴住居跡の時期の新旧関係を推定すると、ST3 (8世紀中頃)  $\rightarrow ST2$  (8世紀末 $\sim 9$ 世紀初頭)  $\rightarrow ST$ 

1 (9世紀前半)の順であると考えられる。

なお、今回は奈良~平安時代に属する遺構のみが確認されたが、西端の落込みからは弥生時代中期末~後期、古墳時代前期、奈良~平安時代の遺物が出土している。おそらく層位に関係なく出土していることから後世に攪乱を受け遺物が落込み内に移動したと思われる。またテストトレンチから縄文中期の土器も出土していることから、この周辺は縄文時代から間欠的に人々が生活を営んできたと思われる。しかし、調査区北西には旧吉野川河川道の痕跡である「丸堤」が存在し、調査区東側の落込みから調査期間中も湧水があったことから、この地は水位が高い後背湿地であり、居住性から考慮すると集落としてはあまり快適とはいえない立地であったであろう。

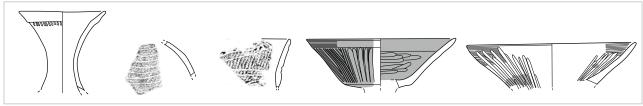
#### これまでの沢田遺跡の調査の成果(第14図)

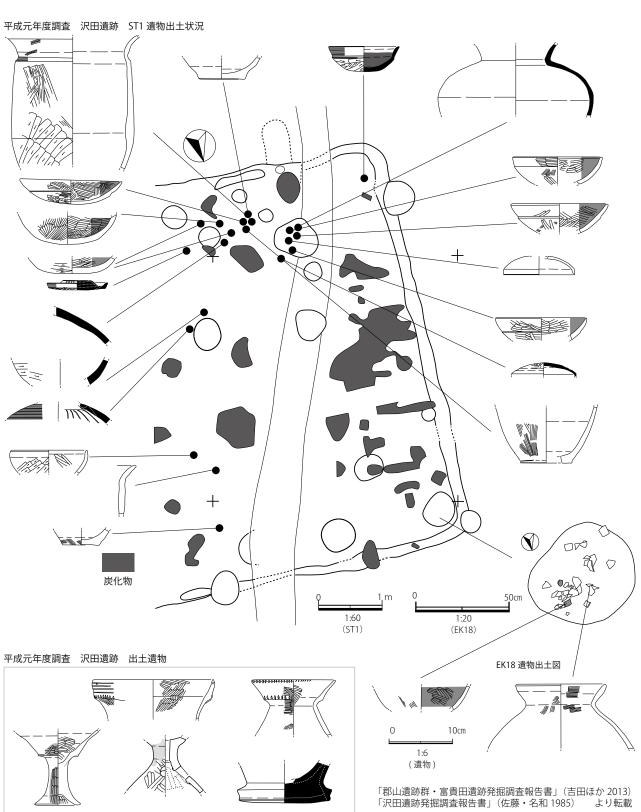
前記のとおり沢田遺跡ではこれまでに昭和58年・59年に山形県教育委員会が、平成元年・2年・4年に南陽市教育委員会が調査を行った。沢田遺跡は赤湯駅の西側に広がる遺跡で、その範囲内で開発される箇所について部分的に発掘調査が行われてきた。

昭和59年度の調査では、竪穴住居跡6棟と掘立柱 建物跡4棟、集石遺構などの遺構が確認され、弥生時 代(中期・後期)、古墳時代(前~中期)、飛鳥時代、 奈良~平安時代(8~9世紀)の土器が出土している (佐藤・名和1985)。

平成元年度の調査では、焼失家屋とみられる竪穴住居跡が良好な状態で確認されており、郡山遺跡群の主体となる時期よりやや古い7世紀末~8世紀初頭のものとみられる多量の土師器や須恵器の土器や円面硯・紡錘車が出土している。また遺構外から弥生時代、古墳時代、奈良~平安時代の土器が出土している。ところで、第16図・左下の高坏について「郡山遺跡群・富貴田遺跡」(吉田2013)では古墳時代前期・漆町9~10群並行期(4世紀後半)に属するものと報告したが、漆町3~4群(月影式、2世紀後半)並行期

#### 昭和 59 年度調査 沢田遺跡 出土遺物





第 16 図 沢田遺跡出土遺物

のものであることをここで訂正したい。 (註3)

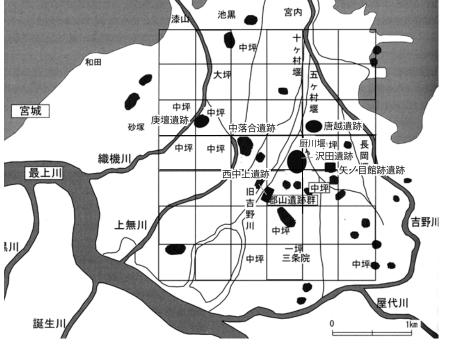
#### 結び

前記の通り、今回の調査範囲は320㎡と狭く、遺構面が削平が顕著だったにもかかわらず、古代の竪穴住居跡3棟が検出され、8~9世紀においては一般集落の一部と思われる。また、遺物は縄文から平安時代までと幅広い時期の遺物が出土した。

沢田遺跡から北東方向へ約700mに位置する唐越 遺跡では区画施設や規則的に建てられた掘立柱建物群 が確認されていることから官衙的性格をもつ遺跡とし ている(吉田・角田2016)。また旧吉野川河川道を 挟んで南南西方向へ約1kmに位置する中落合遺跡(氏 家・髙桑2008)も同様の性格をもつ遺跡であり、両 遺跡ともに8世紀後半~9世紀末のものと思われる。 沢田遺跡を含む「郡山遺跡群」はそれらの遺跡の中間 地点のやや南側に位置する。沢田遺跡は竪穴住居跡で 構成され区画施設などが確認できないことから一般集 落の様相が濃いと思われる。この3遺跡の位置関係を 河川道の図に重ねると(第17図)、旧吉野川河川道

沿いに沢田遺跡・唐越遺跡のほか、古代の遺跡の広が りがみられる。また沢田遺跡と唐越遺跡の間には『厨 川堰』があり、この堰は古代から存在したものと思わ れる。中落合遺跡は上無川に隣接するように位置して いる。また、溝から8世紀末~9世紀半ばに属する 大量の墨書土器や鳥形須恵器片、猿投産灰釉陶器片な どの官衙的要素を持つ土器が出土した庚壇遺跡が沖郷 地区の北西を流れる織機川沿いに位置している(押 切・須賀井 2007)。そして沖郷地区には第17図のと おり「中ノ坪」「大坪」「一ノ坪」「条」など条里制を 想像させる字名が残っているほか、沖郷地区には条里 の東西基線の大路と思われる道が現存している(佐藤 鎭 2010)。矢ノ目館跡遺跡で道幅約3mの畦畔状遺 構を伴う道路遺構が確認され(吉野 1984)、最下層 から8世紀代の坏が出土しているが、主体となる遺物 は9世紀末~10世紀初頭の土器や木器である。また 西中上遺跡では南北に走る溝2本(SD5・SD6) があり出土した土器からSD5は8世紀第4四半期~ 9世紀前半、SD6は9世紀後半と報告されている(氏 家・吉田 2007)が、この溝についても沖郷条里の名 残りの可能性が考えられる。

以上のとおり、沢田遺跡は8世紀後半~9世紀末の官衙的遺跡もしくは条里制遺構に囲まれた一般集落遺跡であり、旧吉野川の後背湿地という地形ながらも居住地域として利用された地域であるということが30年間という発掘調査期間を経て明らかになったといえよう。



第17図 南陽郡山遺跡群と沖郷条里

「第IV章 置賜郡の官衙関連遺跡 第3節 南陽郡山遺跡群」 『平安初頭の南出羽考古学一官衙とその周辺一』 (佐藤鎭 2010) より転載・加筆

#### 註

3) 阿部明彦氏のご教示による。

### 表 4 【参考】土器編年表

実年代	漆町絲	扁年	北陸編年	東海編年	畿内編年	
AD0		V - 1				
	漆町1群	V - 2	猫橋	山中式後期	V様式	
		V - 3				
	漆町2群	2 - 1	法仏		\/I <del>1</del> \ <del>*</del>	
AD160		2-2	\ <u>\</u> \ <u>\</u>		VI様式	
AD169	漆町 3 群	3 - 1		廻間 I 式		
	涂町 3 杆	3 - 2	月影		庄内I	
	漆町4群					
	漆町5群		фòт	7088 U <del>- 1</del>	庄内Ⅱ	
AD258	漆町6群		白江	廻間Ⅱ式	庄内Ⅲ	
AD230	漆町7群		古府クルビ		庄内IV	
	漆町8群		白州フルモ	廻間Ⅲ式	布留丨	
	漆町9群		高畠		布留Ⅱ	
	漆町 10 群		同田	松戸式前期	II et ult	

加藤学 2011 より転載・編集

#### 引用・参考文献

阿部明彦	2015	「出羽南半における古墳時代のはじまり」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 15 資料集』ふたかみ史遊会
阿部明彦 • 水戸弘美	1999	「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
阿部明彦・吉田江美子	2004	「出羽の土師器とその編年」『出羽の古墳時代』高志書院
氏家信行・髙桑弘美	2008	「中落合遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集
氏家信行·吉田江美子	2007	「大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 158 集
押切智紀•須賀井明子	2007	「庚壇遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集
角田朋行	2016	「南陽市遺跡分布調査報告書(4)」南陽市埋蔵文化財報告書第13集
加藤 学	2011	「正尺C遺跡出土の縄文施文土器-天王山系土器の下限を探る―」『研究紀要第6号』
		(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
佐藤鎭雄•佐藤庄一	1987	「南陽市史 考古資料編」南陽市史編さん委員会
佐藤鎭雄	2010	「置賜郡の官衙関連遺跡」『平安初頭の南出羽考古学』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤庄一•名和達朗	1985	「沢田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第88集
菅井敬一郎ほか	1990	「南陽市史」上巻」南陽市史編さん委員会
髙桑弘美・佐藤祐輔ほか	2010	「百刈田遺跡第1~4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 184 集
山田 渚・吉田江美子	2013	「長岡山遺跡・長岡山東遺跡」『南陽市埋蔵文化財調査報告書第7集』南陽市教育委員会
吉田江美子ほか	2013	「郡山遺跡群 富貴田遺跡」『南陽市埋蔵文化財調査報告書第6集』南陽市教育委員会
吉田江美子・角田朋行	2016	「唐越遺跡」『南陽市埋蔵文化財調査報告書第 12 集』南陽市教育委員会
吉野一郎	1984	「郡山 矢ノ目館跡遺跡」『南陽市文化財調査報告書第1集』南陽市教育委員会

## 写真図版







調査前状況(東から)

調査前状況 (南から)



重機稼働状況(南西から)



調査区面整理作業(東から)



TT1遺構検出状況(北から)



TT1 ST4 (南から)



TT1 ST4完掘状況 (南から)



TT1 ST4遺物出土状況 (南から)

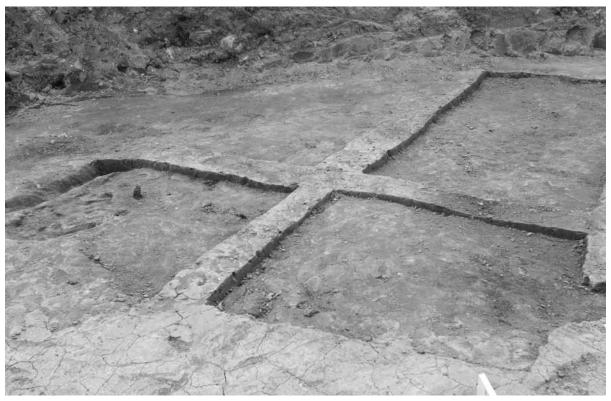
TT1 ST4 調査状況

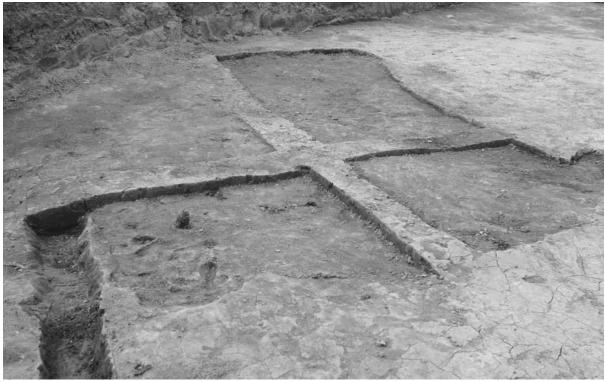
写真図版 2





調査区検出状況(北東より)





S T 1 調査状況 (上:西から 下:南西から)





ST2調査状況 (上:西から 下:南から)

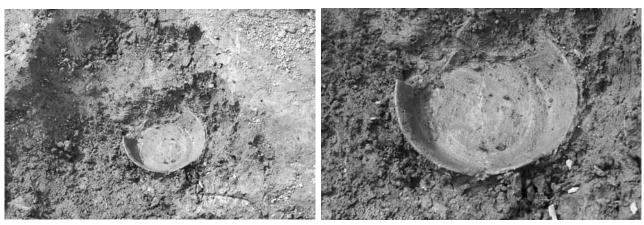


SK4調査状況(上:北西から)

ST2・SK4調査状況



ST3遺物出土状況 (左:南から 右:東から)



ST3遺物出土状況(北から)



調査区完掘状況(西から)

ST3遺物出土状況 調査区完掘状況 写真図版6



ST1(手前)ST2(奥)完掘状況(西から)



ST2完掘状況(南東から)





調査区完掘状況(西から)



ST1・2 須恵器坏 (第12図1.2.3)



ST3 土師器甕(第12図5)



ST3 土師器甕 (第12図6)

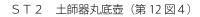


左: S T 3 土師器甕 (第 12 図 7 ) 上: S T 3 須恵器坏 (第 13 図 1 )

ST1~3 出土遺物

写真図版 9



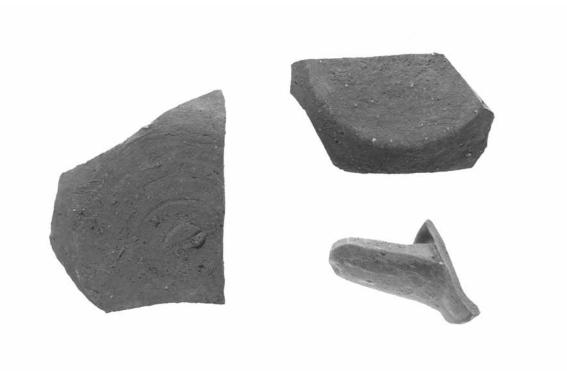




ST3 土師器丸底壺(第13図2)



ST3 土師器甕(第13図3)



SK4 須恵器(第13図4~6)

ST2~3・SK4 出土遺物



弥生土器(第13図7・8)



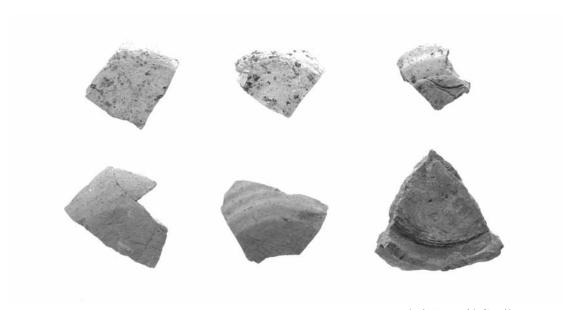
古墳時代 土師器 (左上から第 13 図 9 ~ 13)



台付甕脚部(第 13 図 14)



台付甕脚部 (第 13 図 15)



須恵器 (上段:第13 図 16. 18 第14 図 2 下段:第13 図 17 第14 図 1.3)



砥石(第14図4)



陶器 器種不明(第14図5)



土師器丸底壺 (第 13 図 12)

弥生土器 (第14図6・7)

遺構外・試掘トレンチ 出土遺物 写真図版 12







試掘トレンチ内住居跡 土師器甕 (左:第 14 図 10 上:第 14 図 9) 須恵器蓋 (下:第 14 図 11)



縄文土器 (上:第15図1) 土師器 (右:第15図4)



試掘トレンチ 出土遺物 写真図版 13





土師器 丸底壺 (第15図5)



須恵器壺(第15図6)

土師器埦 (上:第15図2 下:第15図3)

## 報告書抄録

TK 口 目 12 M									
ふりが	なる	さわだい	せきはっくつ	ちょうさほうさ	こくしょ				
書	名	沢田遺跡発掘調査報告書							
副書	名								
巻	次								
シリーズ	名	南陽市	市埋蔵文	化財調查	報告書				
シリーズ番	号	第 14 集							
編著者	名	吉田江美子 角田朋行							
編集機	関	南陽市教育委員会							
所 在	所 在 地 〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地 1 TEL 0238-40-3211								
発行年月	日	2017	年3月	31 日					
ふりがな	ふりカ	な	コ	ード	北緯	東経		調査面積	Ė
所収遺跡名	所在:	地	市町村	遺跡番号	· ' "	0 / //	調査期間	m²	調査原因
さゎだいせき 沢 田 遺 跡	やまがたけん県しかでは、県し市では、県し市のからで、郷に西のからで、郷に西のからで、駅では、西のからでは、東京では、西のでは、東京では、東京では、東京では、東京では、東京では、東京では、東京では、東京		6213	154	38° 04′ 32″	140° 14′ 28″	20150527	320	置賜広域行 政事務組合 南陽消防署 の新築
所収遺跡名	種別		主な時々	代	主な遺構	主な遺物	特記事項		Į
さゎだいせき沢 田 遺 跡	集落跡	弥生 古墳 奈良			竪穴住居跡 掘立柱建物跡	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石製品	された。調	查区東端 弥生土器	居跡群が確認 の落込みから 、古墳時代の
南陽市は北部を山地が占め、南部は旧吉野川・上無川・織機川によって形成された複合扇状地である。縄文・弥生・古墳・奈良〜平安・中世・近世の遺跡が存在している。稲荷森古墳に代表される古墳時代前期の古墳群、丘陵の尾根に群集する飛鳥〜奈良時代の終末期古墳群、奈良〜平安時代の官衙的性格を持つ遺跡が近年の調査で確認されている。  本遺跡は JR 奥羽本線赤湯駅の西側約 270m に位置し、南北に走る吉野川旧河道両岸の後背湿地内に形成された集落である。奈良〜平安時代の竪穴住居跡 4 棟などが確認されたが、削平が著しい。しかし、奈良時代の竪穴住居跡のカマドからは当時使用した土器が良好な状態で一括出土し、米沢盆地の土器編年の基礎資料を得られた。また、調査当時にも湧水が確認できた東端の落込みからは、縄文時代中期、弥生時代中〜後期、古墳時代前期、奈良〜平安時代の土器がまとまって出土した。									

## 南陽市埋蔵文化財調査報告書第14集

## 沢田遺跡

2017年3月31日

発行 南陽市教育委員会 〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地 1 電話 0238-40-3211 代 印刷 有限会社 文進堂印刷 〒 999-2221 山形県南陽市椚塚 811 番 3 号 電話 0238-43-2116